[研究論文]

ルドルフ・シュタイナーによる長・短調の考え方

梅林　郁子

本研究は、ルドルフ・シュタイナー Rudolf Steiner（1861〔クラリエヴェック〕－1925〔ドルナッハ〕）独自の音楽理論のうち、特に長・短調、及び音程における考察を目的とする。

1. はじめに

シュタイナーはオーストリア・ハンガリー帝国内のクラリエヴェック（現クロアチア領）に生まれ、オーストリア、ドイツ、そして特にスイスのドルナッハで活動した思想家、オカルティスト（神秘学者）である。彼は音楽、美術、建築、教育、農業、医学、哲学、宗教などの各方面で、人智学 anthroposophie[1] に基づく独自の思想を提示すると共に、様々な実践も行った。日本において、最も名の知られている活動としては、彼の名を冠したシュタイナー学校（自由ヴァルドルフ学校 [2]）の設立とそこで実践されているシュタイナー教育が挙げられる。今日、日本のみならず世界各地において、シュタイナー学校は多くの人々から賛同を得、益々その数を増やしている一方で、その背後にある彼の思想については、著書や講義録の量的な膨大さ [3]と、彼独自の、ある種宗教的とも言える考え方が基礎にあることから、理解しやすいとは言い難い。

そこで本研究では、シュタイナーの様々な分野にわたる思想のなかから対象を音楽に絞り、特に長・短調並びに音程について、彼独自の言語や歴史に関する記述を参照しながら考察したい。

研究対象は、シュタイナーが音楽に関して残した講義録『音楽の本質と人間の音体験 *Das Wesen des Musikalischen und das Tonerlebnis*

im Menschen』(1906～23 年の講義を収録) (Steiner 1969〔邦訳 1993〕) と『見える歌としてのオイリュトミー *Eurythmie als sichtbarer Gesang*』(Steiner 1984〔邦訳 2001〕) (1924 年 2 月の講義を収録) を中心とするが、適宜他の資料も参考とする。

2. 調

シュタイナーの思想においては、言語 (特に母音)、その表現としての動き (オイリュトミー)、人間の構成体、そして長・短調のそれぞれが不可分であり、ひとつの有機的なまとまりとなっている。そこで、本項では各々の要素がどのように関連するのかを検討した上で、彼の調性観を考察したい。

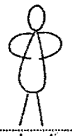
2.1 母音とオイリュトミー

シュタイナーの音楽思想の出発点には、文字とその音に伴う体験がある。その基礎は母音 a-e-i-o-u にあり、そこでシュタイナーは、文字を音として考え、同時に体験として捉えようとしている。つまり、a は最初の文字 (音) として、「世界を驚きの気持ちで受け止め」(シュタイナー 2001 : 5)、e は「世界に対立して私もここに存在する」(*ibid.*5) という体験を伴うのである。同様に、o は「自分自身から出ていき、何かを自分の中に包み込む」(*ibid.*6)、u は「何かと結ばれている。でも、そこから離れ (中略) どこか他の所に向かっていく」(*ibid.*6) という体験を伴っている (i については後述)。これらの体験はシュタイナーにとっては自明の理である。しかし、このような音と体験の関連性が、一般の人々にとって簡単には受け入れられないとすれば、それは今日では文字が体験と離れた形で「固まってしまっている」(*ibid.*5) ために分かりに

くくなっているだけであり、その体験は依然として現在でも存在しているとシュタイナーは考えた。

さて、このように音と体験が密接に結びついていることを前提に、シュタイナーは、身体の動きでこの体験の表現を試みた。これがオイリュトミー **Eurythmie**[4] の基礎である。オイリュトミーによって、先ほどの **a** と **e** 及び **o** と **u** を表現すると、**a** は「腕を二股状に広げる」(*ibid.*5)、**e** は「自分自身に触れる（交叉した手)」(*ibid.*5) として表現される。同様に **o** は「両腕で円を」(*ibid.*6) 作る、**u** は講義中において実演されたため、文としては明確に残されていないが、恐らく手を伸ばし、「先へ、先へ、先へ」(*ibid.*6) と向かう様子を示したのであろう。【表１】は、以上を踏まえ、各音の動きのモデルと体験を一覧にしている。

【表１】音の動きと体験（a、e、i、o、u）

音	動き[5]	体験
a		世界を驚きの気持ちで受け止める
e		世界に対立して私もここに存在する
i		外への体験と内での体験の間にある
o		自分自身から出ていき、何かを自分の中に包み込む
u		何かと結ばれている。でも、そこから離れ（中略）どこか他の所に向かっていく

2.2 母音と4つの構成体

さて【表１】のなかでｅ、ｉ、そしてｏの間に二重線を引いたが、これはａとｅ、そしてｉを挟んでｏとｕの音のグループが、違う性格の体験を有することを示している。つまり、ａとｅは、世界に対して自分自身が完全な形で存在することを、ｉは「中立的に自分自身を感じる」（*ibid.* 11）ことを、そしてｏとｕは「自分」が「自分自身」から出て行くことを意味する。つまり、ａからｕに向かい、次第に「自分」は「自分自身」から離れていくのである。それでは、この場合の「自分」と「自分自身」とは、何を表しているのだろうか。

シュタイナーは、人間が４種類の要素から構成されていると考えた。それは、物質体（肉体） Physischerleib、エーテル体 Ätherleib（または生命体 Lebensleib） 、アストラル体 Astralleib、自我 ich である。これはシュタイナー独自の用語で、概ね、物質体は無機物、エーテル体は有機物を生命として保つ力、アストラル体は有機物に与えられる意識、自我はこの三つの体（たい）の上に位置し、三つの体を統一する力を持つ超感覚的な実体と言える。そして彼は、【表２】のように、この世の物質を大きく鉱物、植物、動物、人間と分け、それぞれが持つ体が異なると考えた。

【表２】物質と所有する体

物質	所有する体
鉱物	物質体
植物	物質体＋エーテル体
動物	物質体＋エーテル体＋アストラル体
人間	物質体＋エーテル体＋アストラル体＋自我

【表２】において、人間は基本的に四つの体が揃っている物質として捉えられるが、これは常に四つの体が備わり続けているということでは

なく、欠けることも有り得る。それが上述の「自分」が「自分自身」から出て行く場合を指している。ここで表されている「自分自身」とは4つの体が揃っている状態で、抜け出る「自分」の方は「アストラル体と自我」である（*ibid.* 6)。【表２】によれば、アストラル体と自我がなければ、人間は植物と同じものになってしまうが、実際には、「覚醒しつつ眠り込む」（*ibid.* 6）植物同様（とシュタイナーが考えた）状態になる。つまり、古来人間は、o と u の音を発音するだけで、このような状態を体験していたし、それをオイリュトミーによって身振りとして表せば、先の【表１】の動きの型となるのである。

このようにoやuを音として発音するときには、物質体とエーテル体から、アストラル体と自我が一時的に分離することとなる。人はこの発音の際に「覚醒しつつ眠り込む」体験をするのみだが、これは実際の眠りにおいても同様となる。シュタイナーは「人間が眠ると、そのアストラル体は、地球の状態の中にいるだけでなく、他の宇宙領界（星の世界）にも結び」つくと述べ（シュタイナー **1998 : 433**)、それを西平直は「眠っている時、ベッドに横たわっている人間は、物質体とエーテル体を含んでいるが、アストラル体と自我（私）とは含んでいない」（西平 **1999 : 124**）と説明している [6]。つまり、アストラル体は元々、アストラル界（星界、または幽界）に属しているものであり、眠りの際には、物質体などから分離し、アストラル界に戻る。そのため人の眠りは、毎晩アストラル体がアストラル界に戻ることにより、自分自身がアストラル界と繋がりを持っていることを（無意識的であれ)、認識させるという役目を担っていると言えよう。そして、上述のoやuを発音するということは、眠りでこそないが、このアストラル界との繋がりを、起きながら眠ることで認識する体験、言うなれば眠りの疑似体験なのである。

2.3 母音と長・短調

前項で、a-e は自分自身（四つの体）が完全である状態、u-o は自分自身からアストラル体と自我が出て行くことを述べたが、カール・フォン・バルツ Karl von Baltz[7] はこの状態の前者を「世界において満たされる」、後者を「世界において流れる」状態と表現している。この場合の「満たされる」とは、肯定的な意味というよりも、むしろ変化の無い閉鎖性を示し、「流れる」状態は、世界へ向けての自分自身の開放性を示すと捉えられる。そしてバルツは、この状態が人間の両極性を表し、さらには音楽における長調（ドゥア Dur）・短調（モール Moll）が、この両極性を解くものであると述べている。つまり、彼は「世界において満たされる」状態が短調で、それを表現すると a-e の身振りとなり、また「世界において流れる」状態は長調であり、u-o の身振りとして形にできる（【表１】参照）と説明しているのである（Baltz 1981 : 29）。シュタイナーは、これについて、以下の様により具体的に述べている。

「健康ではちきれんばかり（中略）な人間はドゥアの気分の中にいて、その人のアストラル体はほとんどいつも「o」と「u」に相当する動きをしています。（中略）病気の人は絶え間なく、（中略）「a」の気分或いは「e」の気分にさせられています。病気の人は絶え間なくモル（＝モール）の気分の中にいます。」（括弧内は筆者が挿入）（シュタイナー 2001 : 8）というシュタイナーの言葉からも、彼が長調と短調が人間の生そのものに結びつくと確信していることが分かる。このことは、モールのなかにいる病気の人間が、正しく o-u を体験するならば、その人はドゥアの治癒の状態へと導かれるとも考えられ、これが今日シュタイナー学校やシュタイナーと関連する病院などで行われている治癒オイリュトミー（治療のためのオイリュトミー）の基礎となっている。

つまり、人間は「母音を正しく体験するとき、モル体験とドゥア体験への導きを」（シュタイナー 2001：9）得ると、シュタイナーは考えていたのである。

2.4 長・短調のオイリュトミー

このように、彼は母音と長・短調、並びに人の性格の密接な結びつきを論じた。そしてさらに、長・短調に関してもオイリュトミーで表現できると考えたのである。特に、彼は長・短調の基本としてそれぞれのＩの和音の動きを挙げている（シュタイナー 2001：9-11）。それをまとめたものが、次の【表３－１】と【表３－２】である。

シュタイナーが例として挙げた和音は C-Dur と c-Moll のＩの和音であり、それぞれ長三和音、短三和音となる。現在、私たちが学ぶ音楽理論では、根音（基音）の上に長三度と短三度を順に重ね合わせたものが長三和音、根音の上に短三度と長三度を重ねたものが短三和音となっている。しかし、シュタイナーは、母音、そして母音のオイリュトミーと同様、和音に関しても身振りによって、その動きを自然に体験できるとした。

【表３－１】長調のＩの和音とオイリュトミー

段階	音	身振り
1.踏み出し	C	右足で前方に一歩進む
2.動き	E	右の掌を外側に向けつつ、その手を右足の方向へ動かす
3.形成	G	左腕が右腕に軽く突き当たるように動かす

【表３－２】短調のＩの和音とオイリュトミー

段階	音	身振り
1.踏み出し	C	左足で後方に一歩進む
2.動き	Es	左の掌を内側に向ける（手は前方に）
3.形成	G	右腕を左腕の上に持ってくる

【表３】にまとめた身振りは三段階の動きで構成され、長三和音と短三和音の動きは、ほぼ左右対称となるが、若干異なっている[8)]。この身振りで興味深いことは、最初の音Ｃと最後の音Ｇは両方の和音に共通であるにも関わらず、長三、短三のいずれかの和音に属することにより、最初の一歩の踏み出しであるＣの方向が、既に異なっているところである。つまり、シュタイナーはＣを身振りで表そうとしているのではなく、Ｃを動く時点で、どちらの和音とするのかを、既に決定していることになる。同様に、Ｇも同じで、３段階目の身振りは、Ｇのための身振りではなく、あくまでも三和音を形成するための動きであることが分かる。

このように見てみると、シュタイナーは身振りとして長三和音、短三和音を動く前に、既にその和音を想定していると考えられる。この彼の想定する和音を明らかにするには、和音を分割し、二つの音程の組み合わせとして捉える必要がある。それにより、さらにシュタイナーの音楽理論の核心に近づくことができるのである。

3. 音程

前項で、一般の音楽理論では、長三和音と短三和音は長三度と短三度の組み合わせによる積み重ねによって形作られることを述べた。同様に、長三和音と短三和音の双方とも、根音と第五音の音程は完全五度となっている。そこで、この項では特に、シュタイナーの音程に関する思想を、

彼特有の歴史観ないしは宇宙観をも視野に入れながら、三度と五度を中心に[9]検討したい。

3.1 シュタイナーの歴史観

現在私たちは、科学的根拠に基づく仮説や実証などにより、宇宙の生成から地球の誕生、そして今日に至るまでの発展を知っている。それはある程度、人類の共通認識、または常識と言ってよいだろう。しかし、シュタイナーが考える宇宙や歴史は、私たちの一般常識とは全く異なっている。しかも、この考え方は彼の音楽思想と密接に関わっているため、以下にまとめたい。

シュタイナーは「地球進化の過去と現在と未来を考察するときには、土星紀、太陽紀、月紀、地球紀、木星紀、金星紀、ヴルカン星紀の進化について語ることができる」[10]（シュタイナー 1998：412）と述べている。つまり彼は、地球の発展を土星紀からヴルカン紀までの七段階に分類し、現在はその四段階目の地球紀にあたるとしている[11]。そして、土星紀から地球期にかけての人間の発達は、先に挙げた【表２】の鉱物から人間への発達と一致しており、土星紀の人間は肉体しか持たなかったが、紀を追うごとにエーテル体、アストラル体と増え、現在の地球紀の人間は四つの体を持つに至ったのである（西平 1999：143-144）。

さらに地球紀は楽園の時代（ポラール時代）、ヒュペルボレアス時代、レムリア時代、アトランティス時代、ポスト・アトランティス時代に細分化され、現在はポスト・アトランティス時代（西暦の紀元前 7227～紀元後 7893 年）となっている。その上ポスト・アトランティス時代も更に七段階に下位区分され、順にインド文化期、ペルシア文化期、エジプトーカルデア文化期、ギリシアーラテン文化期、ゲルマンーアングロサ

クソン文化期、スラブ文化期、アメリカ文化期となり、今はゲルマン－アングロサクソン文化期（西暦 1413～3573 年まで）である（西川 2002：180、189、253）。

以上をまとめると、私たちの生きている時代は、地球紀のポスト・アトランティス時代のうち、ゲルマン－アングロサクソン文化期の途中に位置すると言えるのである。

3.2 五度体験と三度体験

さて、シュタイナーのこのような歴史観を踏まえた上で、音程との関わりを考察したい。彼は、古代の人間は広い音程しか認識できず、その後、時を経るごとにより狭い音程が分かるようになったと考えた。そのため、先に挙げたレムリア時代には九度を（*ibid.* 74）、アトランティス時代には七度を、ポスト・アトランティス時代にようやく五度を（シュタイナー 1993：47-48）認識できるようになったと考えた。地球紀の人間は、既に四つの体が全て揃っていたが、アトランティス時代の人間は、まだ肉体との結びつきが弱く、2.2 で述べた睡眠時のアストラル体と自我の離脱が、覚醒時にも日常的に行われたと考えられる。その離脱に必要な体験が七度の音程であり、七度によって「人間は地上との結びつきから解放され（中略）、べつの世界に入っていくのを感じ」（*ibid.* 47）ることができた。そしてこの時代、自分が別の世界に入っていくことが「音楽を体験する」（*ibid.* 47）ことと同義だったのである。

しかし、次第に人間のアストラル体や自我は肉体との結びつきが強くなり、ポスト・アトランティス時代に入ると、もはや覚醒時に地上との結びつきが絶たれることを拒み始め、「七度体験が苦痛なものと感じられはじめた」（*ibid.* 47）のである。こうして人は五度の体験に移行し、そ

れに「大きな満悦を感じ」(*ibid.* 47) るようになり、その状態をシュタイナーは「天使がわたしのなかで音楽家になりはじめた」とか「ミューズがわたしのなかで語る」(*ibid.* 47-48) と表現している。つまりこれは、もはや人間は肉体を離れにくくなってしまったが、音楽はまだ、天からの贈り物であり、主観的な自己表現ではなかったということを意味する。

このように、人は進化と共に狭い音程を認識できるようになってきたが、三度が認識できるようになったのは、ポスト・アトランティス時代のギリシアーラテン文化期（紀元前 747～紀元後 1413 年）であった。この文化期には、人は既に睡眠時以外には肉体から離脱せず、アストラル界にも頻繁には帰れなくなった。そして肉体との結びつきがより強くなるにつれて、人は自己を主張するために音楽を奏でるようになったのである。つまり天使やミューズが音楽を作るのではなく、「『わたしは歌う』と言えるようになるためには、三度体験が必要だった」(*ibid.* 48) のである。こうして、五度の時代には主観の入る余地がなかった音楽は、三度によって主観を付せられるようになり、三度によって長調、短調が意味を持つようになった。これは「長調と短調は人間の主観、地上的身体と結合した人間の感情の営みと結びついて」(*ibid.* 48) いることを意味している。こうして現在、音程は、私たちが認識している音楽の根幹にあり、それによって現在の私たちは、感情を伴う長・短調の音楽を作曲し、また演奏することとなったのである。

4. まとめ

本稿の目的は、シュタイナーの音楽理論のなかでも、特に長・短調、及び音程を考察することであった。彼の音楽思想は人智学に基づいていることから、人と宇宙の関わりについて非常に広範な捉え方をしている。

そのため、本稿は音楽について、シュタイナーの言語（母音）観や歴史観などの関連する分野について、合わせて順次検討してきた。

彼の考える長・短調はそれぞれＩの和音が基盤であり、長調のＩの和音である長三和音と短調のＩの和音である短三和音は、それぞれ五度の枠のなかに含まれる長三度と短三度の和音の配置によって決定される。そしてシュタイナーによれば、五度は天使やミューズなどの音楽、そして三度は人間の主観的な音楽であるため、長三和音、短三和音は五度という宇宙的な枠のなかにある人の感情、若しくは主観の発露と捉えられる。

シュタイナーにとっては、現在の人間でさえも全くアストラル界から分離したわけでなく、睡眠時においては無意識であれアストラル界に帰るという体験をしている。同様に、三度が体験され、音楽が主観的なものとなった現代においても、五度の枠にある囲まれた三和音が各調のＩの和音として存在することにより、この世の音楽が、完全に地上的なもののみでできているわけではない、と考えられるのである。シュタイナーの考えは、人が人として個別に生きていることを認めるのではなく、宇宙とのつながり、またそれに伴う様々な分野との有機的つながりを認識することにより、来世をも含めたより広い世界で人間の生を認めるものであり、音楽もこの思想の一環として捉えられているのである。

5. おわりに

シュタイナーの生きた 19 世紀後半から 20 世紀初頭は、現代と比較すれば、当然科学は発展の途上にあった。そのため、今日では科学として捉えることが厳密には難しい分野も、当時は、科学的に解明できるのではないかと期待される時代でもあった。「19 世紀末には、科学とオカル

ティズムとの間の境界線はまだはっきりと引かれていなかった。物理学者たちがエーテル理論や微細『流体』理論などを保持しているあいだは、オカルティストのほうでも（中略）『アカシャ[12]』とか（中略）『アストラル光』といった教義が科学によって解明されることを期待していた」（ゴドウィン 2001：207）とジョスリン・ゴドウィン Joscelyn Godwin は述べている。現在では、エーテル、アカシャ、アストラルなどが科学として捉えられることは困難であると共に、今世紀までの科学の目覚しい発展により、オカルトと科学の関係のみならず、世界の様々な現象は細分化され、それを一つの大きな理論に総合することは困難と考えられるようになったのである。

また、本稿で論じたシュタイナーの音楽理論は、言葉や人間の構成要素など複数の分野との関連を示しているにも関わらず、実際にはドゥア、モール体験という発想自体、長・短調を基礎としているヨーロッパ音楽のみに基づいている。彼は音楽に関しては独学であり、またオーストリア、ドイツ、スイスを拠点に活動したという地域的な制約もあって、非ヨーロッパ音楽と触れる機会も少なかったと考えられる。そのため、母音と音楽を結び付けようとする場合、必然的に長・短調というヨーロッパ的な音楽理論のシステムが現れたのであろう[13]。しかし、シュタイナーは当時入手できた最大限の知的情報とそれに基づく思想から、言葉と音楽を有機的に結びつける方法を見出そうとしている。

このように、シュタイナーが普遍的な科学として人智学と音楽理論を結び付けようとした背後には、彼が多大な影響を受けたヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ Johann Wolfgang von Goethe の姿がある。ゲーテもまた、人間の内的状態と色彩について論じた『色彩論』（ゲーテ 2001）において、彼なりに入手できた科学的情報と彼自身の思考におい

て、色彩について論じたが、現代においてはこの記述は科学的には一部を除いて正しいとの評価は得られていない[14]。しかし、ゲーテもシュタイナーも、共に科学と思想の融合を目指して考察を続けたのである。

科学的に実証できることが正しいと考える21世紀の私たちにとって、シュタイナーの人智学に基づいた思想を、時代遅れであり、また荒唐無稽な戯言と捉えることは簡単である。しかし一方で彼の理論は、実証できないとしても、様々な物事に有機的なつながりがあることを主張し続けている。その意味でシュタイナーは、非常に広く総合的な視野で — それは私たちが現在認識している時空とは異なるほどに広いかもしれないが — 人間の生を捉えようとした思想家だったのである。

註

1) 人智学は、シュタイナー独自の考えから生まれた精神科学であり、「人間存在の中の精神」が「宇宙の精神」(西川 2002 : 162) と深く結びついているという考えが根本にある。

2) 日本では、シュタイナー学校と呼ばれることが多いが、一般には1919年にヴァルドルフ・アストリア社（煙草会社）の従業員の子供たちのために設立されたことから、自由ヴァルドルフ学校 Freie Waldorfschule と呼ばれている。2003年現在、ヨーロッパを始め、アメリカ、アフリカ、オセアニア、アジアなど、世界中に850校を超える学校が運営されている (Bund der Freien Waldorfschulen の HP 参照)。

3) 1900年以後は、特に頻繁に講演を行い、その数は25年間で6000回を超えていた。

4) オイリュトミー（語源は ευ ρυθμυς 美しいリズム（ギリシア語））は「心地よく美しい、均整の取れた動き」(西川 2002 : 72) を意味する一種の舞踊であるが、

同じくヨーロッパ起源のバレエとは異なり、身体の線の美しさを追求するものではない。むしろ、言葉や音楽の体験を、身体を用いて表現するものである。

5) 動きのモデル（人型）に関しては、子安美知子のドイツにおけるシュタイナー学校1年生のオイリュトミーの授業記録を参考とした（子安 1981：89）が、各母音と動きの結びつきの解釈（ibid. 92-93）については若干異なっている。

6) 同様に、シュタイナーは人の死についても、物質体からのエーテル体、アストラル体、自我の分離と捉えている。また、彼は人間の生まれ変わり説を取っており、人が亡くなった後、各体が変容し再び受肉するまでを、一つのプロセスとして捉えている。このように、死後も各体が変容していく過程は、「死後の生」（西川 2002：132-138）、「生まれ変わりのライフサイクル」（西平 1999：127-141）など、生やライフという言葉を、死後にまで拡張して使うことにより説明される場合が多い。

7) バルツ（1898-1987）はシュタイナーの研究者であり、またヴァイオリニストでもあった。スイスのドルナッハにはシュタイナーの建設したゲーテアヌムという人智学の活動拠点となる施設があるが、バルツも晩年はドルナッハ近郊の村アレルスハイム Arelsheim に住んでいた。

8) この身振りに関しては、シュタイナーが図を残している。図についてはシュタイナー 2001：14-15 を参照のこと。

9) 本研究では三度と五度を扱うが、実際には一度から七度はオクターブに内包される形となっていて、これは一筆書きのような図で示すことができる。音程の図示の方法についてはジンメル 1998：59-60 を参照されたい。

10) ここでの土星、太陽、月などは現在私たちが天体に見る星とは、全く異なっている。

11) 既に過去となっている土星紀、太陽紀、月紀の三つの段階、及び現在である地球紀に関して、シュタイナーは各紀別に詳細に説明している（シュタイナー

1998：160-310)。

12) アカシャ「阿迦捨」は虚空を意味する。「世界で生じたすべての（できごとの）痕跡をイメージの形で保管している」（括弧内は筆者が挿入）（西川 2002：15）データベースのようなものを指す。シュタイナー自身も『アカシャ年代記より』（シュタイナー 1981）という著作を記しているが、彼だけでなく、現在でも多くのオカルティストが、アカシャの存在については言及している。

13) この件に関連して、シュタイナーの思想と人種差別の問題にも一言触れておく。小杉英了は「この時代のヨーロッパ人が、非ヨーロッパ人に対していだいていた認識から、シュタイナーが完全に超越していたと考えるのは、信者の態度である」（小杉 2000：190）と述べている。しかし、オランダの人智学協会は、少なくとも当時の一般的観点からは、シュタイナーの思想において人種差別的な思想は見られないとの調査報告をまとめている（Info3-Verlag の HP 参照)。

14) ゲーテの自然科学に対する姿勢について木村直司は「当時はまだ自然科学者（Naturwissenschaftlicher）という表現がなく、ゲーテはつねに自然研究者（Naturforscher）あるいは自然愛好者（Naturfreund bzw. Liebhaber）という言葉を用いていた」（ゲーテ 2001：477）ことを、ゲーテの『色彩論』の後書きで指摘している。

参考資料（著者・編者姓、団体名アルファベット順）

1. 文献

BALTZ, Karl von

1981 *Rudolf Steiners musikalische Impulse.* 2.Auflage(1.Auflage in 1961). Dornach: Philosophisch-Anthroposophischer Verlag.

GODWIN, Joscelyn ゴドウィン，ジョスリン

1991 *L'ésotérisme musical en France 1750-1950.* Paris: AlbinMichel.

〔高尾謙史訳　2001　『音楽のエゾテリスム ― フランス「1750-1950」秘教的音楽の系譜』東京：工作舎。〕

ゲーテ，ヨハン・ヴォルフガング・フォン

2001　『色彩論』木村直司訳　東京：筑摩書房。

小杉　英了

2000　『シュタイナー入門』東京：筑摩書房。

子安　美知子

1981　『魂の発見 ― シュタイナー学校の芸術教育』東京：音楽之友社。

西平　直

1999　『シュタイナー入門』東京：講談社。

西川　隆範

2002　『シュタイナー用語辞典』東京：風濤社。

ジンメル，ハインツ

1998　「オイリュトミーの歴史と理論」高橋弘子訳『オイリュトミーの世界』11-80. 東京：水声社。

STEINER, Rudolf　シュタイナー，ルドルフ（GA は全集番号）

1910　*Die Geheimwissenschaft im Umriss.* GA13. Dornach: Rudolf Steiner Verlag.〔高橋厳訳　1998　『神秘学概論』東京：筑摩書房。〕

1969　*Das Wesen des Musikalischen und das Tonerlebnis im Menschen.* GA283. Dornach: Rudolf Steiner Verlag.〔西川隆範訳　1993　『音楽の本質と人間の音体験』（抄訳）東京：イザラ書房。〕

1984　*Eurythmie als sichtbarer Gesang.* 4. Auflage. GA278.Dornach: Rudolf Steiner Verlag.〔松山由紀訳　2001　『見える歌としてのオイリュトミー』神奈川：オイリュトミースタジオ・ルラ。〕

1986　*Aus der Akasha-Chromatik.* 6. Auflage. GA11. Dornach:Rudolf Steiner

Verlag.〔高橋巌訳　1981　『アカシャ年代記より』東京：国書刊行会。〕

2. HP（管理者名・団体名、URL の順に記載）

Bund der Freien Waldorfschulen. http://www.waldorfschule.de/

Info3-Verlag. http://www.info3.de/index.html

うめばやし　いくこ

国立音楽大学（ピアノ）、お茶の水女子大学大学院修士課程（ピアノ）を経て、同大学院博士課程（音楽）修了。博士（人文科学）。主要論文：「フーゴー・ヴォルフのリートにおける朗唱性 ── 歌唱旋律に見られる同音反復について ── 」『音楽学』48/3：182-192（2003 年）、『フーゴー・ヴォルフのリートにおける朗唱性に関する研究』（東京：雄松堂）（2002 年）（2001 年博士論文）ほか。現在、高崎芸術短期大学専任講師。